

氏 名 官脇 千絵

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1532 号

学位授与の日付 平成24年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 変化しつづける装い—中国雲南省文山モンの自己と他者を
めぐる人類学的服飾研究—

論文審査委員 主 査 教授 野林 厚志
教授 塚田 誠之
准教授 横山 廣子
教授 中谷 文美 岡山大学
教授 杉本 星子 京都文教大学

論文内容の要旨

本論文の目的は、中国雲南省文山壮族苗族自治州のモン（Hmong、ミャオ族の下位集団）にとって装いがどのような意味を持つのかを明らかにすることである。それを、衣装の変化に焦点を当てて考察した。

モンの上位集団であるミャオ族は、色鮮やかな色彩、精巧かつ力強い刺繍や染織の技法、きらびやかな銀飾りや華やかな頭飾りといった、美しい衣装で有名である。ミャオ族は、多くの下位集団を有し、居住地域などによって異なる100以上の多種多様な衣装をもつ。文山州の蒙の「伝統的」とされる衣装には、大麻で紡績をした布が使用され、藍によるロウケツ染や、赤色や黄色を基調とした刺繍（クロス・ステッチの技法）の装飾が施されている。

だが1990年代以降、文山州の蒙の衣装は、化繊のプリント布を使用し、機械刺繍布や色とりどりのビーズを装飾に使ったものが増加し、「伝統的」な衣装と比べて大きく変化している。本論では、蒙の人びとが衣装にどのように変化を加えているのか、その変化は蒙にとってどのような意味を持つのか、を明らかにした。

本論は、文化人類学における服飾研究に位置づけられる。そこで、衣装の変化という視点から、先行研究をまとめた。初期の研究においては、「伝統的」な衣装は、不変であるとイメージづけられてきた。これに対し、「伝統的」な衣装も変化しているという論を提示したのが、1990年代以降の研究である。そこでは、市場経済化によって「伝統的」な衣装の製作・着用・消費のされ方が変化していること、また衣装のエージェンシーに着目することで、衣装そのものが人や社会を動かす原動力となっていることなどが指摘された。しかしこれらはいずれも、衣装そのものの変化に着目しているとは言えない。

続いて、衣装の変化を、従来西洋のものだとされていたファッションという現象のなかで捉える潮流がみられるようになった。その後、ファッション論、そして固定的な衣装（反ファッション）がファッションに取り込まれるファッション化論が展開されるが、そこでもファッションと反ファッション、つまり西洋と非西洋という2項対立構造は打破されなかった。

それは、ファッション化現象が示す変化とは、ファッションの側に立っている者を主体としたものであり、反ファッションをまとめている人びとを変化の外に置いているからである。反ファッションの担い手にとって、衣装の変化がどのような意味を持っているのかが明らかになっていなかったのである。

一方で、本論が対象とするモンとその衣装の変化は、西洋やファッションを対概念として置くことでは、明らかにすることができない。蒙の衣装の変化は、彼らを変化の外におく「みせかけ」のものではないからである。

このような問題意識にたち、本論では3つの設問をたて、それに取り組んだ。

第一に、装いを指標としたミャオ族の他称が名づけられた経緯と、その他称と実際の装いがどの程度一致しているのかを明らかにした。第二に、蒙の衣装が具体的にいかに変化しているのか、それを詳細に明らかにした。第三に、変化のなかにあって継承されている部分を明らかにした。

第一の課題に取り組んだのが第一章から第三章である。第一章では、本論で対象とする

モンについての概要を述べた。第二章と第三章は、ミャオ族そしてモンの装いに関する章である。第二章では、中国においてミャオ族の装いが歴史的にどのように記述されてきたのか、そして装いと集団の分類がいかに関わっているのかを、清代の通称『百苗図』、民国期から新中国成立後の「民族識別工作」に関わる資料をもとに、記述しながらその問題点を明らかにした。第三章では、第二章で検討した問題点が文山州のモンの分類にどのように関わっているのかを明らかにしたうえで、それに対する文山州のモン・エリートたちの対応、そして本論がモンの装いについて記述していくうえでのスタンスを、現在の文山州のモンの装いと製作方法の紹介を通じて示した。

第二の課題に取り組んだのが第四章と第五章である。ここは、本論のベースとなるデータの提示となる。H村で収集したデータを基に、モンの装いの変化の様相を具体的に記述していき、何がどのように変化しているのかを浮かび上がらせる作業をおこなった。それは、何が変化していないか、つまりモンの服飾として継承されている部分はどこなのかということをも明らかにするための作業である。第五章では、衣装の変化の背景にあるモン衣装の既製服化を取り上げて、それが衣装の変化にいかに関与しているのかを明らかにした。また、製作方法を簡略化しながらも、モンの衣装を製作し続けている理由について検討をおこなった。

第三の課題に取り組んだのが第六章から第八章である。ここでは衣装の変化と継承に関する分析をおこなった。第六章では、伝統的素材である大麻に焦点を当てた。ここでの論点は、大麻という素材にこだわっているのは誰なのかということである。葬送儀礼での麻の使用について記述しながら、大麻にこだわっているのは死者であり、対して生者であるモンは伝統的素材よりも衣装の「かたち」を重視していることを明らかにした。これを通じて、ここでは麻に付与されている象徴性を浮かび上がらせることができた。第七章では、既製服化によるデザインの変化を取り上げた。人びとがなぜ最先端の流行を求めるのか、それを衣装のどこに自分らしさを表現するのかという点から分析した。第八章では、サブ・グループごとに異なるとされている衣装が、いかにサブ・グループのメルクマールとなりえているのか、あるいはいないのかを分析した。婚礼衣装を取り上げながら、女性たちがサブ・グループとしてのメルクマールとしてよりも、同村内の女性同士の共有意識を優先させて継承させていることを明らかにした。

本論は、モンの衣装に関する先行研究が、これまでその時間的変化についてほとんど考慮してこなかったことに対し、変化の様相を具体的に明らかにした点で意義あるものだといえる。中国の民族衣装は、「統一された多民族国家」における中国を構成する少数民族の一文化要素として扱われてきたため、イメージの統一化をはかるポリティクスが働いてきた。それに対し、本論でエスニシティにとらわれない衣装の変化を示したことで、中国の民族衣装の変化をめぐる議論に、新たな事例を加えるという点で貢献できたと考える。

もうひとつの意義は、変化を詳しくみることで、モンにとっての装いが意味するところを浮かび上がらせた点である。既存の研究とは異なり、主体を変化する衣装の着装者においたことで、彼らが衣装とどう向き合っているかを論じることを可能にした。それは着装者の需要としての衣装の変化を論じるための視点の獲得である。モンの人びとは、自分たちの交流や行動の範囲内における他者との同質化に気を配り、共有意識を重視する。同時にそこにみせる個人のこだわりで他者との差異化をはかり、装いを通して自分を表現して

いる。その積み重ねが、衣装の変化につながる。個人的な嗜好や主観といった、不確かであらざるものがないものが変化の原動力となっているのである。

本論が、広く一般社会に貢献できる意義は、「民族衣装」を現代日本の我々の装いと同一ステージで扱うことを可能にする視座の提示である。私たちは、民族衣装に対して、エキゾチックな感情を持ち、それらがあたかも、普段の私たちの装いとは全く別世界に存在しているかのように扱う。しかし、周りの人と同じような恰好をしたい、しかしそこに少しだけ人とは違う部分を出して自分らしさを表現したい、という装いに対する思いは我々もモンも共通に持っているのだと言える。

本論文は、中国雲南省文山チワン族ミャオ族自治州（以下、文山州とする）に居住するモン（ミャオ族の下位集団）の衣装の変化に着目し、その実相を多面的に明らかにするとともに、自己と他者をめぐって展開する装いの意味を考察した意欲的研究である。

論文は、先行研究の検討と問題の所在、調査の概況を記す序論、データを提示して議論を積み上げていく第一章から第八章までと、まとめの終章からなる。

導入の第一章で、従来の研究では看過されてきた文山州の蒙の生活世界を詳述したうえで、第二章から第八章において、1) 時間的・空間的に広い視野から捉えた蒙の衣装とエスニック・アイデンティティとの関わり（二章、三章）、2) 文山州における蒙の衣装の変化（四章、五章）、3) 装いに関わる変化に反映される蒙のさまざまな価値観や意識（六～八章）を明らかにしている。

第二章、三章では、『苗蛮図』と総称される絵図を中心とした歴史資料や、民国期から1990年代までの地方志の検討を行い、衣装がその下位集団を識別する指標として外部者によって取り上げられ、それが現在にいたるまで通用しており、自称を共有するミャオの下位集団との対応が不整合な現状を鋭く指摘している。同時に、蒙の知識人が自称名による集団分類に基づいて衣装の特徴を細部にわたって具体的に記した研究が好対照を見せることに言及している。

第四章では、上衣、スカート、前掛け、腰帯、脚絆など蒙の女性の服装品 233 点に関する素材やサイズ、製作技法、製作者や所有にいたった経緯、それらにまつわる記憶に関する詳細なデータを収集、分析し、農村生活の変化の脈絡のなかに衣装の変化を位置づけている。

第五章では、前章で明らかにした近年における衣装の大幅な変化の要因として、蒙の衣装の既製服生産の展開に着目し、服飾工場が創り出す民族衣装の流行のなかで素材や技術が変化し、手仕事が機械に置き換えられていく状況を検証している。とりわけ、地域の人びとが衣装製作に伝統的に用いてきた麻が、1980年代以降、他の素材にとってかわられた過程の記述は、第四章における衣服の悉皆調査の結果とともに、同地域における装いの変化を具体的に裏づけるものとなっている。

第六章では、日常の衣装の変化とはうらはらに、冥界に移行する死者の装束として、麻の持つ超自然的な力が蒙社会の伝統として重視されていることを指摘している。

第七章は、近年の布地、装飾素材、色、形状の変化の要因に焦点を当て、海外のモンとの取引の影響も考慮しつつ、女性を評価する基準となっていた衣装製作の手仕事の大半が衰退した現在、装う女性が他者を意識しつつ、外見のデザインに自己表現を求める行為が、急激な変化の原動力となっていると論じている。

第八章では、蒙の女性たちは、母から娘に限定されることなく、ともに生活する周辺の女性たちとの多様な関係のなかで衣装製作技術を継承してきたことを、通婚関係と衣装の形態との分析から明らかにしている。

終章では、全体の議論を振り返り、蒙の衣装は、それを製作し、着用する女性自身が他者と自己とを意識しつつ選択を繰り返す結果、形づくられてきたことを結論として提示している。そのうえで、従来の、外部者がエスニシティの境界との対応を第一義的に捉え

るような意味での「民族衣装」像とは異なる、新たな民族衣装を捉える試み、すなわち日々の装いの行為としての観点からの視座を与えている。

以上の内容をもつ本論文の学術的意義は次の諸点にある。

1) 議論の土台となる、文山州の一農村を中心とする厚みのあるデータは、雲南省に合計3年近く滞在するなか、衣装自体の詳細な情報とともに、衣装製作から着装にいたるまでの営み全体に目配りされた充実した内容で、服飾に関する民族誌として、従来の研究の水準を突破する到達点を示した。現在、世界各地で急激に変化しつつある民族衣装の研究において、参照価値の高い、重要な研究として位置づけられる。

2) 調査地でのフィールド・ワークに基づく考察に加えて、モンの上位集団であるミャオ族に関する地方志や『苗蛮図』など数多くの歴史資料を対象とする文献研究に取り組み、長い時間軸の枠組で民族衣装の考察をおこなった。それにより、他者からの名づけと分類という行為における民族衣装の扱われ方に関して新しい見方を提示した。つまり、人びと自らの名乗りに基づく集団分類とは必ずしも整合しない、衣装の色に基づく分類枠組みを当てはめた外側からの名づけの現象である。

3) モンの上位集団であるミャオ族は、その多様多彩な民族衣装で知られ、従来、その服飾研究は少なくない。しかし、ある地点を定め、その変化の実態をこのように詳細なレベルで明らかにしたものは皆無であった。文山州の蒙ンの衣装の変化を、物質文化論としてだけでなく、装う行為のなかにあるものとして、人びとの意識とともに多面的に考察した本研究は、いわば列挙あるいは分類に終始してきた従来のミャオ族の服飾研究の限界を乗り越える先駆的な研究である。

4) 民族の分類を国家が主体的におこなってきた中国において、外部者、観察者が時代ごとに与えてきた観察や研究にもとづく固定的な民族像を表象しうる「民族衣装」について、土地の人びとは自らの装いを実際にはどのようにとらえ、どのように着装しているかを具体的に明らかにしたことは、人類学的服飾研究としての本研究の視座を生かした新たな知見である。

他方、個々の議論における以下の諸点が審査委員会で指摘された。エスニシティと衣装との関係に関わる議論は、世界の他の地域における民族衣装研究の成果を広範に取り入れ、深める必要があること、中国における少数民族を取り巻く政治状況とモンの人びとの衣装との関係についてさらに踏み込み、民族衣装論をアイデンティティ・ポリティクスに関わる議論へ発展させることが可能であること、蒙ンのサブ・グループ間での衣装の違いが消滅しつつある現状は、サブ・グループ間の通婚の実態をさらに時空間を広げて掌握し、議論する必要があること等である。これらの点は、今後の研究の課題として発展的に取り組んでいくことが期待される。

膨大なデータを収集・整理し、堅実な議論を積み上げた本論文の学術的意義は、博士の学位を授与するに値すると、審査員全員一致で、判断した。